

第 26 回 日本 IVF 学会学術集会

大阪. 2023.11.03-04

女性のライフステージを見えた不妊治療中の子宮筋腫核出術の検討

北山利江

医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

子宮筋腫は性成熟期女性の 20~30%で発生・増大するホルモン依存性良性腫瘍であり、不妊治療目的に当院に来院される方は主に妊孕性改善が目的での管理となる。ただ、一般的に ART での妊娠率は年齢別に 2.9%-48.0%(日本科婦人科学会 ART データブック 2020)と幅があり、当院で加療される方も結果的に妊娠されず不妊治療を終結される方もある。

【目的】

筋腫の手術を勧めるか否かの指標を模索する。

【方法】

当院では、子宮筋腫核出術は基本的には腹腔鏡下もしくは子宮鏡下子宮筋腫核出術を選択しており、子宮筋腫核出後に妊娠・分娩(経膈分娩を含む)となった症例や、子宮筋腫再発などにより後年になって再び手術を行った症例を多数経験している。また、他院で腹式子宮筋腫核出術を行っている同様の症例も多数経験している。

当院で経験した症例を後方視的に検討した。

【成績】

子宮筋腫核出術後に採卵や移植成績が改善し妊娠・分娩となった症例を多数経験している。また妊娠にはいたらずとも子宮筋腫の性質や女性のライフステージも考え筋腫核出術を紹介、依頼した症例もあった。

【結論】

子宮筋腫核出術の紹介時期とその妊娠予後について改めて再考したので報告する。

子宮筋腫によって、過多月経や月経困難、頻尿などの症状がある場合は、年齢や挙児希望などを加味して保存的治療もしくは手術療法を行いながら閉経まで管理していくこととなる。性成熟期女性では、月経関連の症状のほか、妊孕性向上を目的として子宮筋腫核出術(腹式・腹腔鏡下・子宮鏡下)を行うことがある。妊孕性向上を目的とした場合は、分娩時に帝王切開となることが多いため、腹式子宮筋腫核出術が選択されることも多い。しかし、子宮筋腫の性質や女性のライフステージも考えると、果たしてそれでよいのであろうか。